



樋口二葉 著



A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。  
※倍率100%の場合

## 目次

たけくらべ……………	5
にぎりえ……………	69
十三夜……………	113
大つごもり……………	141
わかれ道……………	163

# たけくらべ

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽氣の町と住みたる人の申き、三嶋神社の角をまがりてよりはれぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商ひはかつふつ利かぬ処とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田楽みるやう、裏にはりたる串のさまをかき、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手当ことしく、一家内これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月西の日例の神社に欲深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しのそれは誠の商買人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば当てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等万倍の利益をと人ごとに言ふれど、さりとて思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそね、恨みはかゝる身のはて危ふく、すはと言はゞ命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかき、娘は大籠の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞台と見たつるもをかきからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらゝ忙がしげに横抱きの小包はともでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此処からあげまする、誂へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし、一体の風俗よそと変りて、女子の後帯きちんとせし人少なく、がらを好みて中広の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、所が是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たゝき骨

になれば再び古巢への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとはいくも学びし露八が物真似、榮喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意気は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動会に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよゝゝあらはれて、唯学校と一口にて此あたりには呑込みのつくほど成るがあり、通ふ子供の数々に或は火消鳶人足、おとつきさんは笏橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねへと言はれて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服

かるゝと花敷を、坊ちやん坊ちやんとて此子の追従するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、発心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性来をとなしきを友達いぶせく思ひて、さまゝの悪戯をしかけ、猫の死骸を縄にくゝりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内一人の人とて仮にも侮りての処業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髪も思ひなしか俗とは変りて、藤本信如と訓にてすませど、何処やら釈といひたげの素振なり。

## (二)

八月廿日は千束神社のまつりとして、山車屋台に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が気組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由断のなりがたき此あたりのなれば、そろひの裕衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意